公益財団法人 花王 芸術・科学財団
http://www.kao-foundation.or.jp/

未来につなぐ ライフスタイル

芸術と
ネイチャー・
テクノロジーの
視点から

公開シンポジウム
「美しい生き方を考える」シリーズ 第1回

公益財団法人 花王 芸術・科学財団

公開シンポジウム

「美しい生き方を考える」シリーズ

第1回

2012年11月17日㈯ 13：30 ～ 17：15

東京ミッドタウン・ホールB

（東京都港区赤坂9-7-2）

主催　公益財団法人　花王芸術・科学財団

未来につなぐライフスタイル

芸術とネイチャー・テクノロジーの視点から

目次

プロローグ（P2～P6）

「美しいくらしを求めて」

クリエイティブ・ディレクター、武蔵野美術大学名誉教授、花王芸術・科学財団美術分野選考委員

小池 一子

講演（P8～P20）

「自然のすごさをかしこく活かす」

東北大学大学院教授

石田 秀輝

講演（P22～P29）

「芸術の持つ力」

美術作家

やなぎ みわ

（P30～P39）

パネルトーク

小池一子・石田秀輝・やなぎみわ

登壇者の講演資料の一部を都合により
未掲載にしておりますことをご了承ください。

公開シンポジウム
「美しい生き方を考える」シリーズ第１回

発　行　公益財団法人　花王芸術・科学財団
〒103-8210　東京都中央区日本橋茅場町 1-14-10（花王ビル内）
TEL（03）3660-7055　FAX（03）3660-7994
編　集　公益財団法人　花王芸術・科学財団　事務局
印　刷　トキオ印刷株式会社
発行日　2013 年 3 月 31 日

プロローグ

「美しいくらしを求めて」

小池 一子 先生

クリエイティブ・ディレクター、武蔵野美術大学名誉教授、
花王芸術・科学財団美術分野選考委員

白いタオル

ご紹介いただきました小池です。１９５０年頃、私があこがれていたものがありました。真っ白のタオルです。戦争の時代がようやく終わり、日本に平和の兆しが見えた頃、生活のディテールは決してよくなく、わが家では少し茶色くなった手ぬぐいを大事に使っていました。

それから十数年が経ち、私は駆け出しの編集者となり、美容の取材に出かけました。「シャンプーが、ヘアにとって何より大事」というページで、取材先はカットの名手といわれた名和好子先生の美容室でした。温水のシステムもよいとはいえない時代に、「シャンプーは、頭皮をしっかりマッサージして洗う」という美容の基礎を示してくださったんです。そして、何よりうれしかったのは、一枚の白いタオルで頭をぬぐえば、そのまま自然に乾かすだけでもかっこいいという単純なことでした。

白いタオルは、私にとって豊かな生活のシンボルとなり、欧米のスタンダードで大きなバスタオル、ハンドタオルなど、さまざまなサイズがあることを知り、それを全部そろえることに夢中になりました。

あるフランス映画で、戸棚の上から下まで、真っ白なタオルが整然と並んでいるのを見て、感激いたしました。それから、マリリン・モンローが大きなバスタオルで胸から腰回りまでを包んでいる画像。その時、「セクシーって、こういうことかな？」と思ったことを覚えています。

それから半世紀以上が経ち、白いタオルは私にとっていまだに必需品ですが、ここ数年は大型のバスタオルより、打ち込みのしっかりした３０㎝四方のオーガニックコットンのハンドタオルを使っています。大きなタオルは、洗たくの際に電気エネルギーをたくさん使いますからね。ハンドタオルでも、女性の体ならかなりふきとれるものだということがわかり、本当にこれ一枚で十分だと思えるようになりました。

オーガニックコットンは、強い農薬などを排除していますから、栽培する人たちの健康にいい。これがフェアトレードにつながります。農薬を使わない条件で生まれるコットンを、フェア（対等）な取引の輸出入で私たちの生活に取り入れる。このような方向が、これからの私たちのライフスタイルの一つの基本ではないかと思います。

白い大きなタオルは、戦後から経済成長期を通過した時代の象徴かもしれません。「足るを知る」という昔からの言葉が、いまとても切実に感じられます。「未来につなぐライフスタイル」を表題とした今回のシンポジウムでは、私たちがめざしている生活イメージとはどのようなものか、それを未来にどうつなげていくのか、ということが語られることになります。

東北大学大学院教授の石田秀輝先生は、いまの地球環境を持続させるにはどうしたらいいかについて、切実な問題を含んだお話をしてくださると思います。美術作家のやなぎみわ先生には、彼女を突き動かしている文化・芸術の力についてお話しいただきます。

私は、「過去からつなぐすてきな日本」というプレゼンテーションをしたいと思います。日本人がどのように暮らしてきたか、それをいかにクリエイティブに表現したかということをテーマにします。

ニッポンのデザイン、伝統と現代

画像は、アートディレクターの田中一光さんと共に、社会主義時代の最後の頃のソビエト・ロシアへ持っていった展覧会のイメージカタログからとっています。この展覧会は、「ニッポンのデザイン、伝統と現代」という主題で、情報が封じられていた時代のモスクワの人たちに日本の文化と生活を知ってもらうことが目的でした。

北限は寒帯、南限は亜熱帯に位置する日本列島は、季節の変化に富み、自然に恵まれた環境です。桜前線といって、桜の開花時期がニュースになることは、日本ならではの現象といいましょうか。とてもすてきなことだと思います。

図1

日本人は、衣食住においても、季節の自然を形で表現してきました。それは古くからめんめんと続き、現代の創作もその系譜にあると思います。

イメージカタログの表紙（図１）は、お菓子の中に８０年代に流行ったテレビウォッチを入れています。日本人は季節の変化に敏感で、お菓子に表現された春、そして「時間」を感じているということを示しています。

満開の桜の画像は、京都・円山公園です（図２）。茶壺は、江戸時代前期の陶工の仁清（にんせい）の作品で、吉野山ですが、自然界がクラフトに乗り移っています。毛利家伝来の能衣装と江戸時代後期の打ち掛けのデザイン。京都の舞子さんの花かんざしと現代のアクセサリーのクリエイション。お弁当は、コンパクトな中にどれだけの楽しみを盛り込めるかという、日本独特のすばらしい文化だと思います（図３）。

図2

図3

続いて、漆。クラフト。川上元美さんというデザイナーの家具。家具をつくる江戸時代後期からの道具。柳宗理さんが合板でつくられたバタフライスツール。これは京都の町家ですが、こういう町でも現代のファッションが生きているということは、モスクワの人たちには驚きだったようです。

御所人形の這子（はいこ）と、現代作家の粟辻早重（あわつじさなえ）さんのユーモラスなコーラス人形。広告でどうやって人に知らせるかを努力してきた私たち。こちらは、公家も武家も遊びほうける江戸時代前期の作品です。

ここで夏になります。北山崎の海岸の波と岩を左に置いていますが、この夏の印象が、千家十職の中村宗哲（そうてつ）さんの作品。ナツメの小さな入れ物に収まる自然で、１８世紀くらいのものです（図４）。白い絣のテキスタイル。提げ重（さげじゅう）。麻に染めの美しいのれん。すだれ、花かご。どれも竹を存分に楽しんで使っています。

図4

夏の風物詩といえばおそうめんですが、ここで対比して見せたのは、現代の椅子の傑作の一つ倉俣史朗（くらまたしろう）さんのガラスの椅子です。食べ物をつくるクラフトに必要な包丁。セラミックのはさみ。裏千家の露地行燈。喜多俊之さんの照明器具。

着ることの楽しみを演出していますが、一つは江戸時代中期の「かずき」で、着物に袖を通さずに羽織って頭にかぶる着方の作品です。もう一つは三宅一生さんの８０年代半ばのコレクション。白波五人男の歌舞伎衣装と、若者のかぶくスピリット・竹の子族。

日本にはからくり人形の伝統があります。日本人は、立派な動く仕掛けをつくってきました。

「秋の吹き寄せ」は、紅葉した葉や木の実が集められて、これが食事になってしまう。日本らしいですね。秋の衣装は、日本画家の加山又造さんの作品画像と狂言の肩衣で。お茶。お酒。すべてにつくる人の思いがあって、生活を楽しむために生まれてきました。

楽器では、ヤマハのエレクトーンの初期のものを紹介しています。

これは、ミクロコスモスのような世界を日本人は昔からつくってきたんだなあという、ホンダのモーターバイクのミニチュアの部品です。

江戸時代の絵草紙と、横尾忠則さんのつくった絵草紙。何百年もの間を隔てても、同じように人々の楽しむメディアになっています。

図5

図6

冬の情景です（図５）。右側は雪持竹（ゆきもちだけ）といって、雪が降って積もった竹の風景が、能衣装になります。お正月のすべてにこういうクラフトをつくろうという美術工芸品の世界。水引の極まった作品もあります。

黄八丈。刺し子。南部鉄瓶。おくどさん。初期のシステムキッチン。キッチンユニット。これは、私たちは雪とどう遊んでいるかです。

最後に、火消しの纏（まとい）の方たちが着ている自分たちのアイデンティティ（図６）。これが、現代の企業のアイデンティティとして、ロゴやマークになっていますね。

私の時間もそろそろおしまいですが、こうしてご覧いただいたものは、私たちが継承してきた日本の生活と文化の形です。美術工芸品といわれる領域のものと現代のデザイン

がありましたが、ものをつくり出す力が、美しい暮らしをつくる原動力ということです。ものをつくり出すことは、いわば文化に形を与える、あるいは文化を現実の表現とすること。私たちは、それを「デザイン」と呼んでいます。

形をつくることは、素材を必要とし、金物だったら金工の仕事、焼き物だったら陶工の仕事、竹を使う竹細工。現在では３Ｄの制作も巻き込んでいますね。そのようにして今日までやってきましたが、さてこれからはどのように生活し、つくっていきましょうか。

いよいよお二人のお話を聞く時間が来ました。私は一度退場させていただきます。どうもありがとうございました。

＜掲載写真出典＞
書籍名：『ＪＡＰＡＮ ＤＥＳＩＧＮ 日本の四季とデザイン』
構成：田中一光、小池一子
監修：吉田光邦
ＡＤ：田中一光
発行：１９８４年９月／リブロポート

小池 一子 先生（クリエイティブ・ディレクター）

東京都生まれ。早稲田大学文学部卒業。「無印良品」創業以来アドヴァイザリー・ボード。武蔵野美術大学名誉教授。１９８３年～２０００年日本初のオルタナティブ・スペース「佐賀町エキジビット・スペース」創設・主宰。現代美術の新しい才能を国内外に送り出した。２０００年、ヴェニス・ビエンナーレ第７回国際建築展日本館「少女都市」企画・展示監修。２００４～２００５年、武蔵野美術大学美術資料図書館、及び鹿児島県霧島アートの森「衣服の領域 On Conceptual Clothing：概念としての衣服」展。２０１２年、２１_２１DESIGN SIGHT EXHIBITION「田中一光とデザインの前後左右」展ディレクター。２０１１年～ 佐賀町アーカイブ（３３３１ Arts Chiyoda）にて現代美術作家のアーカイブ展ほか企画実施多数。編著書に『三宅一生の発想と展開』（平凡社、１９７８年）、『空間のアウラ』（白水社、１９９３年）、『Fashion― 多面体としてのファッション』（武蔵野美術大学出版局、２００４年）、『田中一光とデザインの前後左右』（FOIL、２０１２年）など。

「自然のすごさを かしこく活かす」

東北大学大学院教授
石田 秀輝 先生

テクノロジー（企業）の役割とは何か

ご紹介いただきました石田です。僕のいただいたお題は、「自然のすごさをかしこく活かす」。テクノロジーの視点から、豊かであるということを少し考えてみようと思います。僕は長い間企業で働いておりまして、後半は技術戦略と環境戦略の両方の責任者をしていました。技術戦略と環境戦略というのは、まったくオポジットサイドにあるもので、技術は新しい商品開発をする、環境はどちらかというと守る。経済と環境を両立させた新しい戦略をつくるというのが、僕のミッションだったと思うのですが、僕は在社中にその答えを見つけることができませんでした。

企業そのものは、当時、環境先進企業として高い評価をいただきましたが、僕自身は全然納得できず、自己矛盾がどんどん膨らんでいきました。このままでは日本のモノづくりはダメになってしまう。もう一度、環境と経済が両立するテクノロジーとは何なのかを真剣に考えてみようと思ったのが、大学に移るきっかけでした。

モノをつくること、あるいは企業の役割とは、一体何なんでしょうか。これはもう間違いなく、人を豊かにする以外にあり得ません。テクノロジーの役割は、人を豊かにするためにあるのです。では、現実的に我々は豊かになっているのでしょうか。残念ながら１９８０年代前半からは、一人当たりのＧＤＰはどんどん上がっているのに、生活満足度や幸福度は徐々に下がっています。では、僕たちはいま、何を考えなくてはいけないのでしょうか。なんとなく漂っているこの閉塞感とは一体何なのでしょう。それを考えることが、豊かであるということを考える、ドアのノックの仕方の一つではないかと思っています。

豊かさとは何か？

横軸に時間をとって、縦軸に豊かさをとります。明治維新後の日本は、ヨーロッパに追いつけ追い越せと一生懸命頑張ってきました。第二次世界大戦後は、アメリカに追いつけ追い越せと一生懸命頑張ってきました。そしていま、日本は頂点にいます。これは物質的な豊かさです。そして資源やエネルギーを湯水のように使って、これからも成長があるのかと問われれば、それはクエスチョンというのが、多くの人の共通した認識だと思います。

要するに我々は、豊かになり、もっと成長したいけれど、いままでの延長にはそれがないということも、すでに知っている。けれども、どこへ向かっていいのかわからず、みんなが霧の中にいる。これが現実ではないでしょうか。この霧の中で、新しい豊かさはどういう価値観を持つのかを考える。それが、いま求められていることではないかと、思うのです。

では、豊かさとは一体何でしょうか。豊かであるということは、人の欲を満足させるということです。ただし、いままでのように、物質的なものを使って人の欲を満足させることは許されない。なぜなら、地球環境問題がクローズアップされ、従来のようにエネルギーや資源を使うことは許されないからです。制約がかかる中で、豊かさを考えなければいけないと思います。

人にとっての地球環境問題とは？

僕はいつも、こう思っています。我々の周りには、７つのリスクがある（図１）。それは、資源、エネルギーの枯渇であり、生物多様性の劣化であり、食料や水の分配のリスクである。急激に増える人口のリスク、温暖化に代表される気候変動というリスクもある。そしてこれらのリスクを地球環境問題と思った瞬間に、我々は盲目になってしまいます。

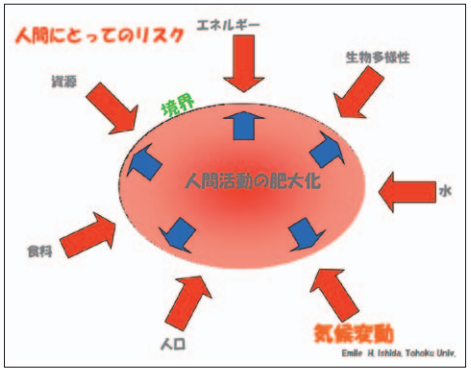

図１

一昨年、アジロマ会議という第１回目の気候工学考国際会議で、こんなアウトプットがありました。地球温暖化が地球環境問題だと思っている人たちのアイデアです。「成層圏に硫酸エアロゾルを撒けばいい」。たしかに、フィリピンのピナツボ火山が爆発した時には、大量の硫酸エアロゾルが成層圏に撒かれて、地球の平均気温は０.５度下がりました。最もお金がかからなくて、最も効果のある地球温暖化対策です。

でもおそらく、ここにいらっしゃる多くの方が、「何か変だな」と思う。なぜか。それは、気候変動だけが地球環境問題だと思っている人たちが、こんなことをすれば、地上には

太陽の光がなかなか降り注がなくなる。その結果、生物多様性はどうなるのでしょう。あるいは太陽の光が海を暖めなかったら、雲もできない。水はどうなるのでしょう。太陽の光が来なかったら、食料はどうなるのでしょう。あるいは、それだけ大きなものを撒くための、資源やエネルギーはどうするのでしょう。

テクノロジーの進化は、トレードオフの繰り返しでした。よかれと思って何かをしようとすると、問題が起こる。その問題を解決するためにまた何かをすると、何かが起こる。そうやってブレながら、テクノロジーは進化していきます。でも、地球環境問題ということを目の前に突きつけられた時、テクノロジーそのものの価値観さえ変わらなければいけないということなのです。

７つのリスクは、残念ながら２０３０年くらいには限界に達します。ひょっとしたら我々は、自らの手で文明崩壊という引き金を引かざるを得ないかもしれません。７つのリスクは、５０年前はリスクじゃなかったのに、この５０年間でリスクになってしまった。そのドライビングフォースは、人間活動の肥大化です。我々は、１日生きていくのに、生命を維持するためだけなら２０００kcalもあれば十分です。ところがいま、日本人が使っているエネルギーは、一人当たり１２万kcal、アメリカ人では、２３万kcalを超えました。我々は、ちょっとした利便性や快適性を得るために、猛烈な資源エネルギーを使っています。人間活動の肥大化そのものが地球環境問題なのです。

どうすれば豊かさは得られるのか？

人間活動の肥大化をいかに停止縮小できるのか。ただし、停止縮小だけが目的なら、企業の存在価値はありませんし、学問もいりません。あらゆるものを配給にすればいいからです。

なぜ企業や学問がいるのか。それは、人間の生きる本質である「心豊かに暮らす」ということを担保しながら、人間活動の肥大化を停止縮小できるのかが、問われているからです。すなわち、持続可能な社会をつくるためには、循環型社会をつくる「地球のことを考えたモノづくり」と、人間の欲を満足させる「人のことを考えたモノづくり」、この２つの要素を同時に満足しなければいけません。この２つが同時に成立した時にしか、持続可能な社会は生まれないということです。

たとえば、人のことを考えたモノづくり。人間の欲について、少しだけ考えてみましょう。僕は、人間の欲の形で一番大事なのは、生活価値の不可逆性という欲の構造だと思っています。携帯電話を１万２０００個集めると、４００ｇの金が採れます。2.7kgの銀が採れます。９８kgの銅が採れます。３つの金属は、政府が、「このままだと２０３０年には供給できない」と言っている金属です。だったら明日から、携帯電話を使うのをやめましょう。ほとんどの人はやめられません。なぜやめられないか。生活価値の不可逆性です。我々は、一度得た快適性や利便性を容易に放棄できない。放棄しようと思ったら、悲しくなる。「江戸時代はよかったね。持続可能な社会に近かったね。だから江戸時代に戻ればいいんだ」と言って、ベンツで帰っていく環境の先生がいます（笑）。

江戸時代に戻れるんだったら、縄文時代にも戻れる。環境問題は起こらないんです。戻れないということが、極めて大きな人間の欲に影響しています。だから我々は、欲を我慢するのではなく、肯定しながら、循環型社会もつくる。これに挑戦をしなければいけないということです。

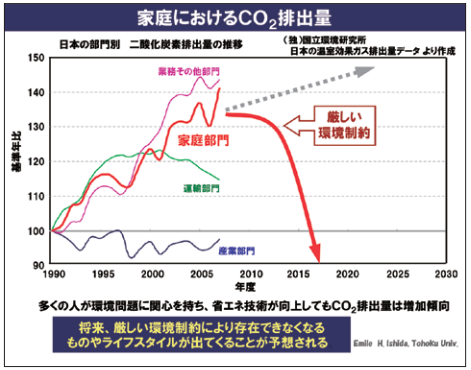

図2

企業の方々も、一生懸命にそれを考えているはずなんですが、現実的にはどうなっているか。これを見てください。実は、企業が努力すればするほど、地球環境は劣化しています。たとえば家庭のエネルギー消費の５０％は、電気です。電気のうちの４０％がエアコンと冷蔵庫です。エアコンと冷蔵庫は、この１５年間でどれだけ進化したか。エアコンは、この１５年間で４０％も省エネになりました。冷蔵庫は、８０％も省エネになって、１５年前の２０％のエネルギーで動きます。

日本は、テクノロジーのレベルが桁違いに高く、使う人たちの環境意識も世界のトップです。日本は、世界で最も環境のことを考えて、貢献している国にならなくてはいけないんですが、家庭のエネルギー消費は、どんどん上がっています。１９９０年の1.3倍です（図２）。おかしい。エコ・テクノロジーは間違いなく市場に投入され、それを使う生活者の意識も世界でトップなのに、これを掛け合わせると、環境劣化が加速をする。これをエコ・ジレンマと呼んでいます。

では、このエコ・ジレンマの構造は何か。ものすごく簡単です。エコ商材が消費の免罪符になっているからです。耳元で、「エコエコ」とささやかれると、「ちょっと大きなテレビ買おうかな」「エコなんだから、エアコンをもう１台増やそうかな」「エコカー買ったから、家族で遠乗りに行こうかな」。その繰り返しが、エコ・テクノロジーの貢献よりも、はるかに大きな消費を生み出してしまう。そしてそれに政府が、お墨付きを与えてしまったんです。『エコポイント』『高速道路１０００円で乗り放題』、そして、環境劣化が加速をしました。

では、エコ・テクノロジーって、悪なのでしょうか。違いますよね。いままでは、快適性、利便性だけを追ってきて、環境負荷を大きくしている。「それはおかしいよね」というので始まったのがエコ・テクノロジーです。最初の淘汰です。エコ・テクノロジーという新しい概念が、生活者に「エコ」という概念を浸透させていきました。しかしエコ・テクノロジーが、環境に貢献しているわけではないんです。何かと何かを置き換えるテクノロジーだけでは、環境劣化を加速してしまう。次の淘汰を起こさなければいけない。次の淘汰というのは、ライフスタイルを変えるという淘汰です（図３）。そこまでいかないと、じつはこの問題は解決しない。だからこそ、僕は、新しい概念のテクノロジー。「心豊かに暮らすということは一体何か」をもう一度考える必要があるのではないかと思います。

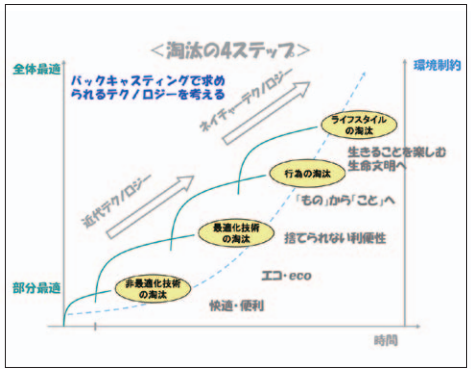

図3

ライフスタイルから考える

では、ライフスタイルは、自ら変えられるのでしょうか。「明日から３０％、エネルギー資源を使わないで暮らしてください」と言われたら、皆さんはどうしますか？　悲しくなります。なぜか。それは、僕たちの思考回路にあります。僕たちの思考回路というのは、フォアキャスト（forecast）という思考回路で、今日を原点にして将来を考える思考回路です。

そういう思考回路では、ライフスタイルは変えられないんです。たとえば、「いま、これだけのエネルギー資源を使って暮らしていますが、２０３０年にはこれだけいります。でも、僕たちが供給できるのは、これだけです。だから、足りない部分は、新しいエネルギーをつくりましょう。省資源、省エネルギーのテクノロジーでカバーしましょう」と、こういう考え方では、どんなにテクノロジーが開発されようとも、我々の思考回路がフォアキャストで発散型であるがゆえ、テクノロジーが供給されればされるほど発散し、ますます消費が大きくなります。これがエコ・ジレンマを起こしたのです。これが悪いというよりも、これをベースにして、僕たちは次のステップに進まなければいけないということです。

次のステップの思考回路とは、フォアキャストではなくて、バックキャストという思考回路です。わかりやすくするために、こんな絵を描いてみました（図４）。皆さんから見た左側が、僕たちが本来持っているフォアキャストという思考回路。右側がバックキャストという、これからつくらなければいけない思考回路。

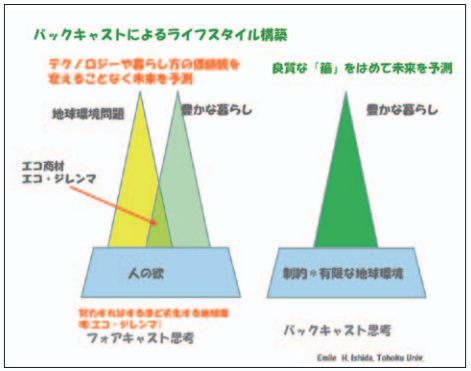

図4

フォアキャストというのは、今日を原点にして将来を考えるので、今日の欲が原点になります。将来を考える時に、「豊かである」という山と、「地球環境」という山の２つを同時に考えることになります。「豊かである」という山の頂点にいる人は、「俺が稼いだ金を何に使っても勝手でしょ」と思っている人。「地球環境」という山の頂点にいる人は、「人間よりメダカやドジョウのほうが大事じゃないか」と思っている人。

では、エコ商材だ、エコ・テクノロジーだと言っているのは、どこでしょうか。それは、２つの山が重なったところです。部分最適だから、エコ・ジレンマという問題が起こってくる。では、これを全体最適にするには、どうしたらいいのでしょう。それが右側のバックキャストです。バックキャストというのは、「２０３０年の厳しい環境制約を認めたうえに、豊かさというのを考えると、どんな暮らしが見えるのでしょう」。この場合、山は１つです。ですから、全体最適になります。

皆さんに質問をしたいと思います。お風呂に入るということを考えてください。２０３０年にお風呂に入りましょう。２０３０年の日本の世帯数は、いまより１千万世帯少ない４９００万世帯。お風呂に１回入ると、３００ℓの水がいります。その水を２０度から４０度に温めます。残念ながら、それだけの水もエネルギーも、２０３０年には供給できません。では、２０３０年にはどうやってお風呂に入りますか？　１５秒考えてください。

「入浴回数を減らす」「シャワーにする」「体を拭くだけにする」「銭湯へ出かける」。ほとんどの方がそうですね。こういう思考回路です。これ、楽しいですか？　ワクワクドキドキしますか？　これは、フォアキャストの思考回路です。僕が質問した時に、皆さんがお考えになったのは、地球環境という山しか考えませんでした。豊かであるという山は、お考えにならなかった。実は考えられないんです。同時に２つの山を考えることはできません。だから、地球環境の話をすると、我慢の話しか出ない。節水、節電、省エネ。みんなフォアキャストの思考回路です。

では、これをバックキャストで考えると、どうなるのでしょう。毎日、お風呂に入ればいいんです。それには水のいらないお風呂をつくればいい。どうやって？　僕はこの答えを、自然の中に探しに行きます。だから、ネイチャー・テクノロジーと言っています。鶏は、砂のお風呂に入ります。豚やゾウは、泥のお風呂に入ります。カケスやツグミは、アリの巣の上に載ってアリのお風呂に入ります。どれも、ちょっと我々には苦手。では、もう少し考えてみましょう。

図5

僕は、泡を考えました。泡は熱を運ぶことができます。泡は、弾ける時に超音波が出て、汚れがとれます。とれた汚れは泡の表面について（泡の表面張力）、もう体には戻りません。そうすると、こんなお風呂ができます（図５）。右側のお風呂。これは３ℓの水で入れます。要するに、３ℓの水で７０度くらいの温かい泡をつくるんです。３ℓの水しか使いませんから、軽い。今日はベッドの横、明日はベランダで、お風呂に入れる。いまよりもっとすてきなライフスタイルが見えるんです。環境制約のおかげで。

こちらは、車椅子のまま入れるお風呂です。水は６ℓで済みます。これと、「シャワーだけにする」「拭くだけにする」、どちらがいいですか？　こちらがいいですよね。同じ環境制約の中でも、豊かということが考えられる一つの切り口になるのではないかと、思っています。

人と地球を考えた新しい暮らし方

２０３０年の厳しい環境制約の中でも、ワクワクドキドキできる暮らし方を考える。それに必要なテクノロジーを引き出す。実際には、こんな格好です。真ん中に２０３０年の環境制約があります。２０３０年にどうなるかは、定量的に見えてきています。その周辺に、生活価値の不可逆性という人間の欲がある。その両方を満足させたら、どんな暮らしが見えるのでしょう。そんなライフスタイルに必要なテクノロジーを抽出すればいい。

現実的には、次のような研究をしています。グラフは、横軸に５０個のライフスタイルのタイトルが書いてあり、縦軸に社会受容性がとってあります。我々は、４００字くらいで書いたライフスタイルを、１０００人の方に見ていただいて、社会受容性を測ります。皆さんから見て左のほうには、社会受容性が７０％を超えるようなもの。バックキャストで書いていますから、フォアキャストのすぐ横にあっても、パラレルワールドみたいなもので、見えないんです。それをちょっと見せてあげると、「あ、これ、いまでもやりたいね」というようなのがある。一方では、右端のように、２０％から３０％くらいしか、社会受容性がないものもある。僕たちがとても興味があることは、なぜ７０％の社会受容性のものがあり、一方で、なぜ２０％のものがあるのか。そこには、僕たちの潜在意識で、制約がかかっているはずです。どういう潜在意識が存在しているのかを見ることができたら、いま求めている豊かなライフスタイルの構造が見えるはずです。その分析結果がこれです（図６）。いまの人たちが潜在的に求めているもの、一番強いものは、利便性です。でも驚いたことは、それと同じぐらいの強さで、楽しみだとか自然を求めているんです。続いて、社会と一体になりたいと思っていますし、成長したいと思っているんです。うれしくなりますよね。

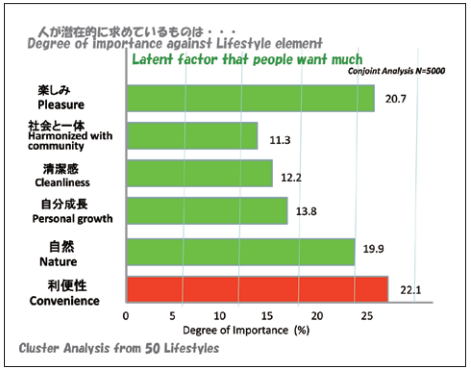

図6

この楽しみの構造を明らかにするために、９０歳の方々にヒアリングを行ないました。９０歳の方々はこう言います。「便利になったけど、いまの人たちはかわいそう。昔のほうが楽しかったね」と。この「楽しかったね」というのは、ひょっとしたら、僕たちが探している「楽しみ」かもしれません。

世界中の９０歳の人からいろんなヒアリングをして、どんな生活価値が見えてくるのか、探そうと思っています。今日お見せするのは、東北地方の６０人の方々の９０歳ヒアリングの中から見えてきた７０個のキーワードです。どれも、日本人として捨ててはいけないすてきなキーワードです。

このデータが出たのが、昨年の１月末。そして３月に震災が起こりました。震災のあと、僕たちは避難所を回りました。すべてのものを失いながら、とっても明るい避難所、ドアを開けるのも大変なほど、重苦しい避難所もありました。重苦しい避難所は、大体サラリーマンが多い。明るい所は、漁山村の人が多いですね。明るい避難所は、なんで明るいのかを一生懸命見ていて、驚きました。ここにあるキーワードがいっぱい散らばっているんです。自然をうまく活かすとか、自然のリズムを感じるとか、自然のサインを読むとか。そういうものが生きている避難所はみんな明るい。だから僕は、確信しています。この７０個のキーワードは、捨ててはいけない豊かな暮らしの入り口、案内板になるかもしれないと。

この７０個のキーワードを４０個に絞り、ライフスタイルを想定して１０００人の社会受容性の調査をしました（図７）。がっかりしました。さきほど説明したものは、社会受容性の平均値が５２.５％もあったのに、４０個のキーワードをライフスタイルに書き直して社会受容性をとると、平均が２９％しかない。２０％以上も下がってしまいました。なぜか。これは、キーワードそのものはすてきなんだけど、僕たちはその時代には戻ることはできない。昔はすてきだったけれど、昔の生活に戻るのは嫌だということなんですね。だったら、昔の生活をいまふうにアレンジ、デザインし直してやれ。そうすると、一体何が起こるんだろうという実験をしてみました。

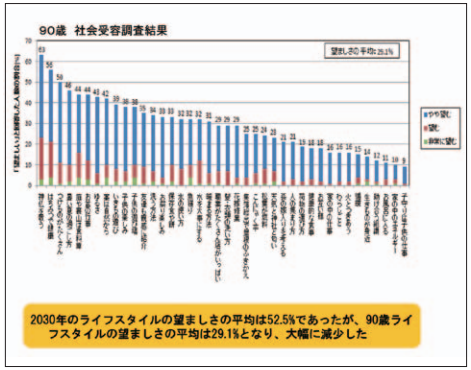

図7

真ん中の共用電池と書いてある絵のところだけ見てください（図８）。昔、お隣さんに味噌や醤油を借りに行きました。それは、味噌や醤油がなくなったからではなく、味噌や醤油がコミュニケーションツールになって、「昨日元気がなかったみたいだったけど、今日は元気になってるね」「娘のことで悩んでいたみたいだけど、解決したみたいだな」ということを知ることができたのです。

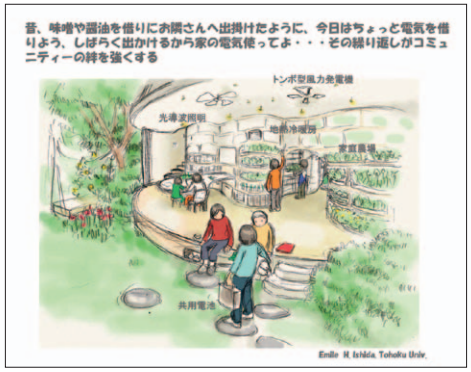

図8

ではいま、味噌や醤油の代わりになるものは何か。それをエネルギーとしてセットしました。たとえば、「今日、うちにお客さんがたくさん来るから、電気をちょっと貸してね」「しばらく旅に出るから、うちの電気使ってもいいよ」。そういう貸し借りができるエネルギーとして、こんなものをつくってみました。貸し借りができるんですから、せいぜい１ kWh ぐらいの電池しかありません。その１ kWh の電池に、８００Wの太陽光パネルをつけます。貯めながら使う。足りなくなったら、電力会社から買えばいい。こんなシステムをつくって、実際に検証をしてみました。

家庭のエネルギー消費というのは、平均して１０ kWh 程度です。このシステムで、何が起こったのか、エネルギー消費が約５ kWh に削減されたのです。たった１ kWh の電池で。被災を受けた方々が、新しい家を買う時に、ローンの中に組み込める程度のちょっとした出費で、エネルギー消費が半分になります。こんなエネルギーテクノロジーは、市場にはない。電池はあります。太陽光パネルもあります。ところが、「貯めながら使って、足りなくなったら買えばいい」。たったこれだけのシステムが市場にはない。なぜでしょう。それは、テクノロジーがライフスタイルに責任を持つ、そういう概念でテクノロジーがつくられていないからです。

人と地球を考えた新しいモノづくり

震災が起こったあと、一服の清涼剤みたいな暮らし方の形をご提示できないかと思って、いままで僕たちが描いてきたライフスタイルで街をつくってみました（図９）。緑がいっぱいで、何だか夢の世界のようですが、この中には６０を超える新しいテクノロジーが隠れているんです。こんなモノづくりをぜひやっていきたいと思っております。

図9

僕は、そうやって見つけたテクノロジーの要素を自然の中に探しに行って、テクノロジーに仕上げるという仕事をやっています。なぜ自然なのか。それは、自然が、完璧な循環を最も小さなエネルギーで駆動しているからです。この地球で唯一、持続可能な社会をつくっている自然に頭をたれて、自然をもう一度サイエンスの目で見て、テクノロジーとしてリデザインをしてやろうと。そうすると、そこに隠れているメカニズムやシステム、あるいは淘汰といわれるような社会性までもが、我々にとって新しい光になるかもしれません。

もう一つ大事なこと。１８世紀のイギリスの産業革命は、自然との決別を成功の原理とし、結果、大量生産、大量消費につながり、物欲をあおるテクノロジーとして、いまの地球環境に大きな影響を与えています。では、自然と決別をしない産業革命。それは、物欲をあおらないのか。じつは、自然と決別しない産業革命に成功した民族が、この地球の中でたった一つあります。それは、江戸時代の日本人です。江戸時代の日本人だけが、それに成功し、消費ではなくて、遊び、エンターテイメントという概念でテクノロジーを消化していきました。そして、その究極の形が、江戸の粋という文化をつくり、柳宗悦の言う、

用の美につながってきます。

用の美の本質は、唯一無二。職人が一生懸命精魂込めたものには、職人が無名であっても、その心が生きている。魂が映っている。だから、江戸の末期から明治の初期にかけて、多くの外国人が日本に来て驚きました。日本はどんなに貧しい人も、芸術品を生活用品の中に使っている。それは、欧米のように、神が天にいて、地上にものがあるのではないからです。

日本の場合は、八百万（やおよろず）の神だとか、仏教でいう、山川草木国土悉皆成仏という、あらゆるものに神仏が宿っている。そういう概念のもとに、精魂込めてものをつくる。それが実は、いまの日本の産業を支えているわけです。ですから僕たちは、決して江戸に戻るのではない。でも、江戸から学ぶことはできる。あるいは自然と決別しないテクノロジー、そういうものをつくり上げた時代から学ぶことができるわけです。

新しいライフスタイルとテクノロジー

最後に、マイクロ風力発電機の話をしましょう。最初に考えたライフスタイルは、こういうものです。

『２０３０年、昔のように石油を使って電気をつくることは難しくなりました。原子力発電も、２０１１年の福島第一原発の事故をきっかけに、先進国ではほとんど運転が停まりました。途上国でも、ほとんどの国でその使用をあきらめているようです。その代わり、薄いけれど大量にある自然エネルギーをうまく使う知恵比べが始まりました。

エネルギーの使い方もずいぶん変わってきました。いまでは、庭先でくるくる回る小さな発電機が、子どもたちの羨望の的です。なぜって、自分で貯めた電気は自分で使うことができるからです。昨日貯めた電気で少しだけゲームをしました。今日貯める電気はゲームに使いたいけれど、お隣のおばあちゃんの補聴器の電気がなくなりかけたと聞いたので、おばあちゃんにプレゼントしようと思っています。明日は、たくさん風が吹くといいなあ。そんなことを思いながら、くるくる回る発電機を眺めるのが、とても幸せです』。

僕たちはバックキャストでこんなライフスタイルを描きます。そこに必要なテクノロジーは、軒先で風鈴がちりちりと鳴っているように、小さな風力発電機がいつも回っていて、子どもが「お母さん、ゲームやってもいい？」と聞くと、お母さんは「やってもいいけど、自分でつくった電気でおやり」と。

その子どもに必要な風力発電機って、どんなものだと思いますか？　止まっていてはダメなんです。強い風が吹いた時だけ回るのではダメなんです。２４時間のうちの２０時間から２２時間は回っている。そういう風力発電機がいるんです。微風でも回る風力発電機でなくてはいけません。

自然のドアをノックすると、トンボが見えてきました。トンボは、昆虫の中で最も低速で滑空ができる性能を持っています。低速で滑空ができるということは、ちょっとの風も浮力に変えることができる。だから、トンボの羽根をうまく使えば、微風でも回る風力発電機ができるはずです。

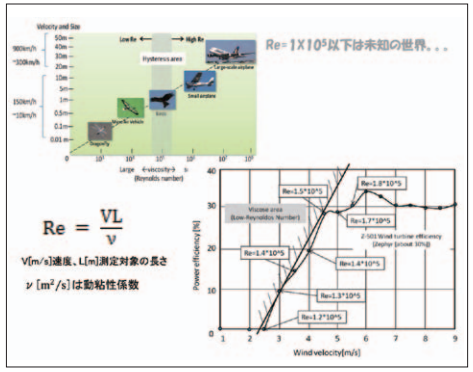

図10

１０の５乗ってありますね（図１０）。この１０の５乗から右側に行くと空気がさらさらしている。左側は空気がねばっこい。皆さんがご存知の飛行機だとか、流線型の羽根を持っているものは、１０の５乗以上のさらさらした世界で飛んでいます。トンボにとって空気は水あめのようなもの。べったりした水あめの中をトンボは飛ぶんです。ですから、いまの最高の性能を持った飛行機をトンボの大きさにすると、絶対飛びません。そして、このトンボが気持ちよく飛んでいる世界というのは、学術的にはまったくといってよいほど研究が進んでいません。

グラフがあります。横軸が風速、縦軸が効率です。世界で最も性能のいい小型の風力発電機の性能です。３ｍのところを見てください。効率１０％。これが精一杯で、風速３ｍ以下ではほとんど回りません。

そして、この接線。１０の５乗の領域です。斜めの接線から左側では、発電機は回りません。でも、トンボは滑空できるのです。僕たちが考えなくてはいけないのは、このトンボが滑空できる領域なんです。ですから、トンボの研究をやりました。トンボの羽根の断面はギザギザです。流線型になっていません。トンボの羽根がギザギザしている凸と凹の間には、小さな渦がたくさん生まれ、くるくる回ります。実はこの渦が、ボールベアリングのような働きをして、ねばっこい空気をベルトコンベアーに乗っけるように後ろに流し、浮力を生み出すのです。だから、凸凹をうまく考えると、なんと風速２０㎝で回り、風速８０㎝でしっかり発電をする風力発電機ができました。

泡から水のいらないお風呂ができました。トンボから微風でも回る風力発電機ができました。土から無電源のエアコンができ、カタツムリが汚れない表面を教えてくれました。そしていま、最も小さな循環をつくってやろうといって、家庭農場に挑戦していま

す。壁からレタス、引き出しからキャベツ、納戸に行けばバジルが生えている。こんなものをつくりたいのです(図11)。

図11

皆さんに笑われるかもしれないけれど、夏の暑いエネルギーを冬使おう。冬の寒いエネルギーを夏使おうと本気で考えています。いままで誰もが思っていてもできなかった。でも、地中の土というものを媒体にして、スイッチングをやるとできるかもしれない。そしてこれが、人を豊かにしてくれるなら、そんなすてきなことはないと思います。

僕たちは、いまの延長ではなく、もう一つステップアップしなければいけません。それは、まったく荒唐無稽のものではなくて、小池先生が最初にお見せになったような、経験に培われた新しい概念。ひょっとしたら、確かな未来は、懐かしい過去にあるのだと思うのです。

石田 秀輝　先生(東北大学大学院 教授)

岡山県生まれ。１９７８年伊奈製陶株式会社(現(株)ＬＩＸＩＬ)入社。２０００年同社取締役　技術統括部部長、環境戦略会議・技術戦略会議兼任議長、ＣＴＯなどを経て、２００４年より東北大学大学院環境科学研究科教授(環境創成機能素材学)。２００５年より同大学院環境政策・技術マネジメントコース教授(兼任)、アメリカセラミックス学会フェロー、ものつくり生命文明機構　理事などを務める。２００５年ネイチャーテック研究会を発足し、代表に就任。「新しいものづくり」の研究・啓発活動も開始、社会人や子供たちの環境教育にも注力している。日本鉱物学会や米国セラミックス学会などから受賞多数。国内外学会を中心に論文・総説など２９０報を掲載(９５の特許を取得)。その他『自然に学ぶ粋なテクノロジー』、『地球が教える奇跡の技術』など著書多数。

「芸術の持つ力」

美術作家
やなぎ みわ 先生

方向転換の末にたどり着いた表現

はじめまして、やなぎです。私は美術作家という肩書きになっていますが、ここ２年くらいは、年に２～３本くらいのペースで演劇公演をやっております。

美術作品では、９０年代の前半から、主に写真作品をつくってきました。私が最初に選んだ表現方法は、絵です。中学生の時からデッサンを習っており、日本画、油画をやりました。しかし高校生の時に布や糸に興味がわき、美大の工芸科に入り、４年間、伝統工芸をやりました。伝統的な型友禅の技法で、屏風、振り袖、訪問着などをつくっておりました。

ところが４回生の時、方向転換をしてしまいます。彫刻や油絵は、仕上がるまでずっと考えながら制作できるんですが、工芸の場合はそうはいきません。プランを立て、素材と技法を触り始めたら、手順どおりにやっていく。ぐずぐず考えながら変更していると、仕上がらないんですね。それが堅苦しくなり、最後の一筆まで考えながら描きたいという、ぜいたくなことを思い始めました。布で巨大な彫刻をつくったり、部屋を布で覆ってしまったり。そういうことをやりながら、工芸とは違った表現を求めるようになりました。やさしい先生が多くて、単位もちゃんとくれて、卒業もさせてもらえました。

結局、大学院でも工芸をやっていましたが、卒業してからはまったくつくらなくなりました。作品をつくっていない期間が３年くらいあったと思います。そのあとで再びつくった作品が、写真とパフォーマンスを組み合わせた作品で、これが私の２回目のスタートとなりました。

写真とパフォーマンスの作品をつくり始めてからは、年に１回、貸し画廊で個展をしていました。あるきっかけで海外展に出品してからは、皆さんの目に触れるような展覧会にも出してもらえるようになりました。

「マイ・グランドマザーズ」

私の作品を見たことがない方もたくさんいらっしゃると思いますので、どんなものかを紹介したいと思います。「マイ・グランドマザーズ」は、基本的には写真作品と認識してください。このシリーズをスタートしたのは２０００年で、いまのところ３０人近いおばあちゃんがいます。

全部フェイクのおばあちゃんです。主に特殊メイクを使って、若い女性たちに５０年後を演じてもらいます。初めはファッション雑誌の協力を得て、作品を連載していました。モデルは立候補制ですが、誰でもいいわけではなくて、５０年後の自分のビジョンがないといけない。どういうおばあちゃんになっているか、メールでインタビューして、おもしろいと思った方に会って、お願いします。老年になったら、どういうふうに生きたいか。その時社会はどうなっているかということをつくる作品です。

撮影の準備には何カ月間もかかります。打ち合わせをして、顔型をとらせてもらい、特殊メイクのシリコンのシールをつくり、髪の毛を全部脱色してもらったり、特殊メイクをしたり。特殊メイクは、全身にやる時もあります。そして、最終的に撮影をする。これが、おおまかな制作プロセスです。

図1　My Grandmothers MIWA（2001年）

図2　My Grandmothers GEISHA（2001年）

シチュエーションは、応募してきた方が決めて、私といろいろ話し合って、実現します。飛行機のファーストクラスに乗るおばあちゃん、一人二役で孫娘と旅をするおばあちゃん、養子をたくさんもらったメーテルみたいなおばあちゃん（図１）。川端康成の「眠れる美女」は、１０代の少女の役ですが、なぜかおばあちゃん。小説のパロディもあります。

男性モデルもいます。男性の中にも、「おじいちゃんになるより、おばあちゃんになりたい」という方がいらっしゃいます。この方はアメリカ人の男性で、お墓の真ん中にファッションショーの舞台があります。寂しくないように、自分のお墓の周りをファンのお墓で固めるんだとか。

花柳界の舞子さんと芸子さん。「年をとってから舞子さんになりたい」という応募がたくさん来て、若い女の子４人で「お

茶屋さん老人ホーム」をやりました（図２）。しわくちゃな舞子さんは、特殊メイクをしてから舞子さんメイクという、二重のメイクをしています。お座敷を借り切って、撮影しました。

私、この作品、好きなんです。占い師のおばあさんなんですが、ものすごく意地悪で、次々と女の子を泣かすという（笑）。意地悪なおばあさんの希望もけっこう多いです。

「マイ・グランドマザーズ」は、あちこちで展覧会をしました。これは、ベルリンのグッゲンハイム美術館。写真（図３）は私がひたすら解説をしているところですが、ドイツは「作品を説明しろ」という要望が強いんです。さまざまな団体に対して１日に５回ぐらい説明しました。その内容をボランティアの方が書きとって、私が日本に帰ったら代わりに説明します。ドイツでは、「美術館は自分たちのものであり、何かを得て帰るんだ」という熱気がムンムンしています。

図3　ドイツ・グッゲンハイム美術館での個展（2004年ベルリン）

これは、丸亀市の猪熊弦一郎現代美術館です。ここでも「マイ・グランドマザーズ」を展示して、子どもたちに対してのワークショップを行ないました。この写真（図４）は、子どもたちが自分の体の一部をエイジングしているところです。おじいちゃん、おばあちゃんの写真やスケッチを見ながら、自分の手、または顔の半分だけを特殊メイクで老化させて、最終的には写真に撮りました。

図4　特殊メイクのワークショップ（2004年丸亀市猪熊弦一郎現代美術館）

「グランドドーターズ」というのは、「マイ・グランドマザーズ」と反対で、７０歳以上の女性に、自分が孫娘だった時の自分のおばあちゃんのことをしゃべってもらうビデオ作品です。この方たちのおばあちゃんですから、もちろん亡くなっていますし、半世紀以上前の記憶なんですけれども、それをただひたすら、つらつらとしゃべってもらうだけの作品です。ご自宅や老人ホームで聞きとりしました。英語、フランス語、ドイツ語、中国語など、いろいろな国の言葉を、発表する国の言葉に訳し、それを小学生か中学生の女の子に読んでもらいます。

女性の「老い」を表現する

女性の「老い」をテーマにして、ライフワーク的にやってきました。日本にも、モデルになるようなすてきな対象がいらっしゃいますけれど、ほかの先進国と比べると、老いてから活躍する女性のモデルが少ないと思うんです。若いということに制約を感じている方が多く、「老い」に解放感を求めているのではないかなと思ったりもします。

ギリシャ・ローマ時代から、老女をテーマとした作品はありますが、かなり変遷があります。たとえば、ギリシャ・ローマ時代は、わりと写実的で、これは種を撒く老女の姿ですが、すごくリアルに描かれ、かなり尊厳が感じられます。この山羊を抱えた老女もしゃんとしています。

ところが中世になると、女性がロクな描かれ方をしなくなります。たとえばブリューゲルですけれども、年老いたことによって非常にネガティブな状態になっていく。すごく頑迷になったり、意地悪になったり、ケチになったり、滑稽になったりとか。よろしくないものを象徴している描かれ方になっています。

それは、ヨーロッパだけではなく、日本においてもそうだと思います。能楽に老女ものがありますが、若い時の華やぎを失って失望感に苛まれる、無常を表す存在だったりするんです。男性の「老い」の表象とは全然違うのではないか、非常にバランスが悪いという思いを抱きながら、これまでの「老い」の描かれ方をいろいろと見ています。

これは、非常に美しい「老い」ですね。１８世紀頃ですが、自然主義以降になると美しい肖像画も出てきます。身分が高い知識階級の女性を威厳をもたせて美しく描きます。しかし、産業革命以降の時代は、大量生産で、都市に人口が集中してしまったため、いままで老人が家でやっていた仕事が失われていく時代です。若い労働力だけに価値が出てしまい、「老い」の知恵に対する価値がなくなってしまった時代。高齢者にとってはやさしい時代ではなくなってきたと思います。

東洋的な「老い」の表現で、私が３年前につくったヴェネツィア・ビエンナーレの時の写真作品です。女性の裸体ですけれども、高さが３ｍぐらいある、巨大な女神みたいな感じになっています。私のアトリエに全部セットを組んで、背景の絵やジオラマをつくりながら撮っていきました。手前のテントの中に映像作品が入っていて、彼女たちが砂漠で踊っている姿がずっと映し出されています。

日本には翁信仰があり、老いた男性が神になって舞う「翁の舞」があります。能楽の中

で、最も格式が高いといわれています。一方では老女ものもあり、卒都婆小町、関寺小町、鸚鵡（おうむ）小町など、いろいろな小町があって、共通しているのは１００歳の小町だということです。みんな老いたわが身を恥じ、若い時を偲んで舞うものが多い。

山姥（やまんば）は、年をとっているわけではないのですが、社会規範から逸脱し、山に駆け込んだ女性が妖怪になったもの。金太郎のお母さんともいわれています。ヨーロッパのフェミニズムでは、社会規範からはずれて迫害された魔女という存在が、一つのモデルとして必ずあります。それが日本では山姥だと思います。ただ、山姥というのは非常におおらかで、老女だったり、若い女性だったりと、いろいろな描かれ方をしています。これは長澤蘆雪（ながさわろせつ）、こちらは柴田是真（しばたぜしん）です。これは山姥ではなく歌川国芳の「一ツ家」。「安達原（あだちがはら）」という能楽のモデルで、人々を次々殺して金品を奪うという鬼婆の話ですね。

老女信仰について

老女信仰に興味を持っています。翁というおじいさんの神がいるのであれば、老女神はいないんだろうかと思い立ち、いろいろ調べたんですけれど、なかなか見つからないんです。ただ、東京の新宿に、奪衣婆（だつえば）という、三途の川で人の着物を奪うおばあさんがいます。奪衣婆は、亡くなった人の着物を奪うだけではなくて、奪った着物を今度生まれてくる子どもに着せるというんですね。だから、産婆でもあるという。つまり死と生を司るところにいる神様です。

富山の立山に、「おんばさま信仰」というものがあります。おばあさんの像がたくさん祭ってあるんです。加賀藩の廃仏毀釈が非常に激しくて、お寺ごとなくなってしまいましたけれど、もともと６６体あったのが１０体残っていました。木彫でつくられて、目にガラス玉が入り、憤怒の形相。立山は女人禁制の山ですから、ここの姥堂（うばどう）に女性が来て、拝んでいたという神様です。

平泉の毛越寺（もうつうじ）に、老女神楽というものがあります。夜神楽で、真っ黒の面をかぶった「老女の舞」が残っています。ご住職は１０００年変わっていないとおっしゃるのですが、本当にそうかもしれないと思わせる非常に魅力的で神秘的な舞でした。

これは、台湾の媽祖信仰（まそしんこう）です。ご媽祖という神様は、おばあさんかどうかはわからないですが、何千歳とおっしゃっていましたから、私は勝手に老女信仰だと思って行ってみました。大変な熱気でした。毎年４月には、台湾中から媽祖の寺に集まって拝むのだそうです。

長寿の島、沖縄で行なわれるのが、八重山の石垣のアンガマーという祖霊を祭るお祭りです。おじいさんもおばあさんも一緒に、各家にダーッと入ってきて、泡盛を飲みながらひたすら踊る、お盆のお祭りです。おじいさんとおばあさんの祖霊について、どんどん人の家に入っていって、仏壇で一緒に拝むという信仰ですね。老人が神として崇められるところには、生と死の間にあるものに対する敬いがあると思います。

シニア演劇

いま、私が注目しているものに、シニア演劇があります。全国に６０以上の団体がある、年配の方だけの劇団ですね。写真は、埼玉ゴールドシアターで、平均年齢は７０歳以上だと思います。４０何人いらっしゃって、必ず全員が舞台に出るので３時間ぐらいと長いんですが、去年出ていらしたおじいさんが、今年もお元気で出ていらっしゃるのを確認するのもすごく楽しい。

シニアの劇団では、セリフを忘れるのも全然ありです。セリフが正確に言えるとか、演技がうまいとか、そういうものを通り越して、素なのか、演技なのか、よくわからない。そのすごさというのは、見てみないとわからないと思うので、皆さんにもおすすめします。演劇の根源を見るような気がします。

私自身もシニア演劇をやってみたいと思い立ち、やってみました。フェスティバル東京という演劇祭の一環として、東京芸術劇場の前に仮設のガラスの小屋を建て、「カフェ・ロッテンマイヤー」というおばあちゃんカフェを営業しました（図５）。メイドカフェですが、みんな年とっていて、お客さんが来たらロッテンマイヤーさんのように叱りつけるという、全然癒されないカフェなんですけど、すごく人気が出て、中国や韓国のテレビまで取材に来ちゃったというぐらいでした。

図5　カフェ・ロッテンマイヤー（フェスティバルトーキョー2010）

メイド役は公募だったんですが、５０人ぐらいの応募があって、オーディションをしました。８０歳近い方から２０歳ぐらいの方までいらしたので、本当のおばあちゃんと本当はおばあちゃんでない方が混ざっている状態です。おばあちゃんじゃない方は、特殊メイクや技術を駆使しておばあちゃんになっていただいて。演劇もこの中でやりました。

日本人と芸術作品

エレベーターガールの作品は、１９９０年代半ばぐらいからずっとつくっています。エレベーターガールや案内嬢といった日本独特のスタイルの女性をモデルにした写真作品です。消費空間に女性たちがいるような、大きな合成写真の作品をつくってきましたが、現在は、写真ではなく、生身の案内嬢が動き回る演劇作品をつくっています。

案内嬢といわれる方たちが美術館の作品を説明してくれるという演劇作品で、入場者はイヤホンガイドをつけさせられ、美術館の作品を説明されます。そのあと、劇場の中に誘われます。

近代美術館というのは白い箱で、劇場というのはブラックボックスといわれるように、黒い箱です。その黒い箱が白い箱の中に持ち込まれて、いきなりそこだけ演劇空間になるというような試みをやっています。「１９２４」という三部作です。

美術館の作品は、モホイ＝ナジ・ラースローという、１９２０年代から戦後にかけて活躍したバウハウスの作家です。京都国立近代美術館のちゃんとした展覧会で、そこに案内嬢がいて、展示を説明してくれるんですね（図６）。「次の部屋にご案内いたします」と、強制的に連れていかれて、途中から演劇になっていく。

図6　1924 Tokyo-Berlin（2011年　京都国立近代美術館）

見世物小屋口上になったり、講談になったり。案内嬢が話芸を駆使して、作品を説明します。話芸で、美術を説明していくというパフォーマンスです。芝居小屋の中に入ったらドラマが展開しますが、それまでは彼女たちの語りだけで進んでいくというものです。

日本の美術というのは、江戸時代に入ってきて、明治後期くらいまでは解説がついていたと思うんですね。いま、美術館に行ったら、みんな手を後ろに組んで、だまって見ないといけないような。わからないと、自分が勉強不足だと思わなくてはいけないような雰囲気になっています。

江戸時代は、俳句を詠む人が何万人もいたぐらい、教養が高かったのですが、芸術というものはなかったんです。上手な絵師はいたかもしれないですけど、芸術家という概念はない。そういう考え方の文化だったのが、明治以降、変わってしまうんですね。個人表現を尊重しないといけないという考え方になって、ヨーロッパの作品をどんどん輸入するようになります。

近代以降の作品を前近代の手法で紹介してみたらどういうことが起こるのかという、シニカルでアイロニカルな手法。演劇ですから、そういうことができます。これが私の、最新の作品です。どうもありがとうございました。

やなぎ みわ 先生　（美術作家）

兵庫県神戸市生まれ。京都市立芸術大学大学院修了。１９９３年、京都で初個展を開催し、１９９６年以降、海外の展覧会にも多数参加。２００９ 年には、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表作家を務めた。主な作品に、若い女性が自らの半世紀後の姿を演じる写真作品シリーズ『マイ・グランドマザーズ』（２０００年～）、実際の年配の女性が祖母の想い出を語るビデオ作品シリーズ『グランドドーターズ』（２００２年～）、少女と老女の物語をテーマにした写真と映像のシリーズ『フェアリーテール』（２００４年～）など。近年は演劇の主催、作演出を行い、近代日本における諸芸術運動の成立・混淆をテーマとする『１９２４』三部作や、視覚装置をテーマにした『ＰＡＮＯＲＡＭＡ』などを美術館や劇場で上演している。京都造形芸術大学美術工芸学科教授。

パネルトーク

パネリスト
小池一子・石田秀輝・やなぎみわ

小池　それぞれが専門的なお立場でありながら、共通する問題意識をキーワードとして発見できたように思います。それぞれのお話をお互いにどう思われたのか、率直なご感想から始めていただきましょうか。

石田　やなぎ先生は、なぜ「老い」というものをお考えになるんだろうと思っておりましたが、「若い人は『老い』に解放感を求めているのではないか」というお話に、「なるほどなあ」と。まさにそのとおりですよね。江戸時代、「老い」は美しいものだったし、「死」も決して悲しいものではなく、輪廻の一つのドライビングフォースでした。そういうものを正面からとらえるのは、新しい暮らしのドアの開け方なのかな？

　あるいは僕たち自身が長生きするために、薬を飲んだり、何かをするのではなくて、年を重ねていくことをどう受け止めていくのか。それを美しいものとして自分自身の中で育てていく。そんなことを考えなきゃいけないのかなと、やなぎ先生のお話を聞いていて、すごくうれしくなりました。感動しています。

小池　やなぎ先生はいかがでしょうか。

やなぎ　私は、芸術はエコではないということを前提にしていますので、石田先生の環境問題のお話と相反することになるのではないかと思っていたのですが、決してそうではありませんでした。芸術も科学も、わからないことを考えていくというか、そこに石を投げるような行為だと思うんです。「これをすればエコになる」という即物的なものではなく、かなり距離を置いた考え方をされていると。そこにとても共感を覚えました。

小池　そうですね。石田先生がおっしゃったバックキャストという考え方は、やなぎ先生の「マイ・グランドマザーズ」と「グランドドーターズ」にもつながると思います。

石田　まさにそのとおりです。僕たちは、イノベーションを起こそうとか、地球環境で新しい暮らし方をつくろうすると、ゼロベースでやるようなところがあるんですけど。９０歳ヒアリングやバックキャストをやっていると、「確かな未来は懐かしい過去にある」と思います。過去を踏襲するのではなく、過去に我々が培ってきたものを、どうやって咀嚼をして新しい価値観に持っていくかということを、最近強く思うんですね。

　今日、やなぎ先生がおっしゃった「老い」や「老女信仰」は、我々が失ってはいけない過去の形をめんめんと残しています。そういうものをどうやって咀嚼したらいいかはまだわからないですけど、そういうものを受け止めることで、我々の中にいろんなものが芽生えてくる。それが、新しい価値観や失ってはいけない価値観をつくるのではないか、そんなふうに感じました。

小池　たとえば、やなぎ先生というアーティストから課題が出されて、そのイメージを普通の女性がつくっていくわけでしょう。そこでイメージされるものって、欲望ですよね。その欲望の強さとイメージの強さが、私は非常に印象に残りました。

やなぎ　欲望は確かに強い（笑）。でも、自分の恥ずかしいまでの強い欲望を、眺めて笑うということが大事なんですよ。女性と笑いって、なかな

か難しい関係にあると思いますが、自分の姿を笑うことができる人が、うまく老いるのではないかなと思ったりもします。

「老い」というのは、とても残酷なものです。昨日できたことが今日はできなくなる。精神的にも肉体的にも衰えてくるというのは、なまやさしいものではありません。

モデルさんたちは、さまざまな年齢の方がいて、「老い」に対する感覚も違います。たとえば、小学生の女の子は、アニメーションに出てくる魔女になりたいとか、そういうファンタジックな感覚しかないかもしれませんが、それはそれでＯＫなんです。４０代の方になると、自分のご両親の「老い」を見ているので、もう少しリアルなものになってくる。逆に、ものすごく翔んだものになったりもする。それもそれでありです。「老い」のネガティブな部分をわかってないとか、リアリティがなさ過ぎるということは、織り込み済みで、その時想像しうるかぎりの、自分も含めたその時の社会と世界、未来を語ってもらって、私と共同制作する。かなり楽天的な作品です。とりあえず５０年後に自分と世界が存在する、ということですから。

小池　石田先生、これはフォアキャストになるのでしょうか。

石田　そうではないです。積み重ねたものをひも解いてものを見るのは、決してフォアキャストではありません。

今日、小池先生とやなぎ先生のお話をうかがって思ったのは、いろいろな物差しでものを見ることが大事だなと。いまは、いろいろな物差しを持つことをよくないことだと言ったり、コップを一つ動かすのさえ、「環境的にはどうなんだ」という物差しで見ている。大事なのは、「ワクワクドキドキして楽しいんだ」ということを前提に、それを動かす土台として、地球のことや次の世代のことを考えているかどうかというだけの話であって。物差しをいかにたくさん持ってもらうかということを、僕の場合はテクノロジーを通して伝えていかなくてはいけない。

エコカーって、「リットル３０キロ」という物差ししかないじゃないですか。でも、６０kgの人を運ぶのに、1.6ｔの車がなぜいるのか。1.6ｔの車のうちの４００kgが安全装置なんですよ。車の命が終わるまでに一度も使わない。そんなことを考えると、違う物差しで車を見たら、もっとすてきな形になるんじゃないか、もっとすてきな道具になるんじゃないかと思うんです。あらゆる切り口が自在に見えるような、フレキシビリティを持った物差しを、これからの人に持ってもらう一つのきっかけが、今日の小池先生とやなぎ先生のお話だったと思っています。

小池　石田先生のお話に、「自然はテクノロジーの宝庫だ」とありました。やなぎ先生や私にとっては、自然はアートやデザインの宝庫でもあるわけです。ネイチャー・テクノロジーのお話を、もう少しお願いします。

石田　テクノロジーというのは、ラテン語では「テクネ」ですけれど、ギリシャ語では「アルツ」で、「アート」なんですね。ラテン語で自然科学は「スキャンティアナチュラリス」（自然の真実を知ること）です。アートが縦糸だとすると、自然科学は横糸なんですよ。その真実をうまく使って、新しい価値観を生み出していく。これがまさにテクノロジーの本質だと思うんですね。

自然というのは、生命一つをとっても３８億年の歴史があって、その中で淘汰を繰り返していまの形ができています。我々が科学技術と偉そうなことを言っても、たかが２００年。ソクラテス、プラトンの時代から言ったって、１千年ちょっとしかありません。そう思うと、自然はとてつもない世界なんです。

たとえば昆虫だけでも３０００万以上の種類があって、その１種類が過酷な自然の中で、淘汰の繰り返しを重ねて生まれてきたのであれば、１匹１匹の虫が、僕たちには信じられないくらいのテクノロジーを持っている。砂漠にいるキリアツメゴミムシダマシは、砂漠で水を飲むために、朝方逆立ちをします。風上に向かって逆立ちをすると、背中に朝のちょっと湿度を含んだ空気がぶつかって水滴ができる。その水滴がころころっと落ちて、逆立ちしている口に入る。こんなシステムをつくったら、エネルギーをまったく使わずに空気中から水をとることができます。

あるいはヤモリが天井を走り回る。つるつるの天井でも凸凹の天井でも走り回る。ヤモリの足の裏に吸盤は付いていないんです。毛が生えているだけなんですよ。その毛が天井に引っ付いているんです。こんなものができたら、接着の概念が変わってきます。

こういうものをもう１回ちゃんと見ましょう。そして、バックキャストでできたライフスタイルの中で使えたら、こんなに楽しいことはないですよね。「自然のすごさをかしこく使おう」、それがネイチャー・テクノロジーの一つの概念で、今日お話したような風力発電機など、いろいろなものができつつあります。

小池　石田先生は、ミクロコスモスの世界にも目を向けていらっしゃると思うんですけれど、先ほど見ていただいたモーターバイクのミニチュアの分解にしても、お重のお弁当の詰め方にしても、これは日本の特性の一つでしょうか。

石田　僕は、日本人独特の自然観だと思います。日本人って、先進国でおそらく唯一の自然観を失っていない民族です。先進国のほとんどが一神教になるんですけれど、生きるか死ぬかの限界のところまでいかないと一神教にはならない。たとえばヨーロッパでも、１５世紀から１６世紀にかけて、森林が１０％台に落ちています。コロンブスは、新大陸を発見する船にマストをつくれなかったんです。ヨーロッパから木という木がなくなってしまうというぎりぎりのところから、起死回生で産業革命を起こしていくわけですね。

ところが日本は、この２０００年の間、森林率６０％を一度も切ったことがない。こんなに緑が豊かな国はないんです。逆に、緑が人を襲ってくる国もない。僕たちは、自然と決別なんてできないですね。日本の陸地面積は、世界の陸地の中の０.１％しかありません。けれどマグニチュード６以上の地震は、世界の２５％来ます。雨が降ると龍神が棲む川の勾配は、世界の平均の１０倍です。だから、家の前に庭があって、野良があって、里山があって、奥山があって、竹があるんです。

里山は緩衝地帯になっていて、そこから向こうは神の住む神聖な場所として崇められる。だから、日本の神聖な場所は、緑との結界をつくる。ヨーロッパの教会の前は芝生の緑ですが、日本の神社仏閣は白い玉石を敷いて緑との結界をつくる。それぐらい、自然は襲ってくるんです。その一方で、自然は我々に信じられないくらいの恵みも与えてくれる。自然に生かされていることを知って、自然を活かしながら畏怖する。そういう関係をずっとつくってきた中に、自然の美しさを生活に取り込むという概念があったのではないですか。自然を模倣したり、自然の美しさを残そうとしたり、お菓子にして食べちゃおうと思ったり。こんな概念って、日本にしかないと思います。

小池　そうですね。茶の湯のことを思うと、人間にとって一番大事な水と火を密室に閉じ込めて、そこで煮炊きもするという。これはすごいことですね。生きる知恵としての精神性をもたらすものです。

石田　たとえばお金持ちだったら、山を買えば自然を買えるわけじゃないですか。でも日本人のお金持ちは、山は買わないんです。その代わり、見立てをして、小さな坪庭に富士山を持ってきたり、駿河湾を持ってきたりするわけですね。こういう自然観は、外国の人にはいくら説明してもわかってもらえないです。自然の見立てという概念は、日本人独特ではないでしょうか。能や踊りも、何かに見立てているわけです。その美しさとは、大事にすべきだし、美しさだけでなく、暮らしの中にあるということは、とてつもない財産だと思います。

小池　やなぎ先生、いかがでしょうか。

やなぎ　私は京都に住んでいるので、そういうことを日常的に感じることはありますね。

私の住んでいる家は、築９０年ぐらいの大正時代の建物で、とにかく寒い。昔の冬の生活はこうだったんだろうな、と存分に味わうことができます（笑）。すきま風だらけで、暖房は効かない状態だし、身体的にも辛い。でも空間的に余裕があり、家のあちこちに光の届かない闇がある。そのほうが精神的には楽な時があるんですね。

もちろん、東京に住んでいるほうが刺激はあるんですけど、作品をつくる時は、どうしてもそこのところをシャットダウンしたくなる時もあるんです。京都を夜に歩くと、町中で巨大な寺社仏閣の屋根のシルエットを見上げる瞬間があり、タイムスリップしたように感じられます。要するに、街の中に余計なものがあることが大事なのかもしれません。ニュータウンのように現在の生活の必要に応じたものが過不足なく効率的に配されているより、いまの日常生活と程遠いもの、１０００年前の遺跡みたいなものがたくさんある街のほうが、楽なんですよ。

小池　私も、過去の美しさを発掘することを好みますが、「だから、日本がすばらしい」というようなことを言い立てたいんじゃないんです。身の回りでいろいろな発見をしていくということを続けたいと思っていますけれど、これだけ環境劣化が言われている中で、積極的に目を向けていきたい環境づくり。そういうことが、持続可能な社会をつくっていくことなのかなあと思います。

皆さまにアンケートを書いていただき、いくつか質問をいただいています。まず石田先生に、「社会や国家レベルで、パラダイム・シフト、バックキャスト思考への転換をどのように進めていけばいいのだろうか」というご質問です。

石田　そもそも日本が政治で動いたことってないんですよね。だから、「大変だから、政治がなんとかしろ」と言ったって、いままでしていないのにできるわけがない。大事なのは、僕たちだと思うんです。すでにもう予兆はあります。若い人たちは車に乗らなくなった。自転車がいい。あんまりものを欲しがらなくなり、家庭菜園だとか、フリーマーケットに

行くだとか。大きく転換をする予兆というのは、もうあるんです。

もう一つ大事なことは、すべての人がバックキャストはできないんです。そんなに簡単じゃない。リーダーがバックキャストをすればいいんです。そして、バックキャストでできたものを見れば、みんながすてきだと思うんです。企業のトップの方々が、「新しいライフスタイルをつくろうよ」と言って、世の中をちょっと押すことで、一挙に変わっていくのではないかと思います。僕も一生懸命、いろんなものをつくって、世の中に発信をしたいですね。

日本の政治家には、原子力が止まったから何かと置き換えるのではなく、「震災前の７０％のエネルギーでもみんな幸せに生きていける。みんなでやろうじゃないか」ぐらいのことは言ってほしいですね。そういうことと、世の中の流れの予兆の部分が噛み合っていけば、大きく変わる。変えなきゃいけないと思っています。

小池　３月１１日のことは、日本列島にいるかぎり、みんなの頭から離れないですね。やなぎ先生は、いかがですか。

やなぎ　震災の時は広島の近代美術館にいて（奇しくもヘンリー・ムーアの彫刻「アトミック・ピース」を考察する展示でしたが）、そこで、ｉＰｈｏｎｅで、原発が爆発するのを見てしまいました。その時のリアリティというのは、一生忘れられないと思います。私は実家が神戸ですから、阪神・淡路大震災で実家が被災した時も、神戸に行くことができずに、実家の近くが燃えるのをテレビで見ていたのですが、足元が揺らぐ感覚でした。この阪神・淡路大震災の時に、しばらく作品をつくるどころか見ることすらできなくなり、そもそも芸術は、余剰のものであり特効薬ではないことはわかっていました。

ただ、現在、芸術の表現は試されることで、強化されています。すべての人が「どうすればいいのか」ということを突きつけられた。表現者だけではなく、すべての人が。それは、表現者がわざわざ何かをする必要があるのか、表現者である必要があるのかということを突きつけられたということなので、これはよかったことかなと思いますね。

カタストロフを前に、一人ひとりが鏡を持つような感じです。シェイクスピアが「演劇というのは、鏡を自然（世界）に向けて掲げることである。そこに善も悪もすべてが映る」とハムレットに言わせているのですけれど。芸術だけに限らず、すべての人が鏡で自分をのぞき込むだけではなく、翻して世界に向け始めた、と感じましたね。作家や表現者よりも鑑賞者の目が変わっていくことを期待しています。

小池　私の周辺にも、しばらく制作ができなくなったアーティストが何人かいました。身を律して、そして制作に向かっていくという、そのことに感動しましたね。

やなぎ先生への質問があります。「生と死に対する敬い、遊びができるアウトサイダーについて、老いの中で触れられていましたが、ご自身は、高齢化社会における人としての生きがいに何を求めていかれますか」。

やなぎ　高齢化社会の生きがいとしては、次の世代を育てるということですよね。それをいま、非常に感じています。

原発のことに関しては、とにかく次世代に、いやこれからの子どもたちすべてに、申し訳なかったとしか言いようがない。私も、学生の時に、チェルノブイリで危機意識を持ったけれど、特に何をするわけでもなく、原発を「いつの間にか在るもの」と受け入れて、こういう事態に至ったわけです。その負の遺産を次の世代が負っていくわけですよね。私たちにいまできることは、死ぬまでに少しでも事態を好転させられないかということだと思います。

小池　「未来につなぐライフスタイル」をどのようにつくり出していくか、いまが正念場ですね。石田先生のお話を聞いていると、「いま、切り替えなければ」という思いが強くなりますけれど、石田先生、高齢化社会ということに対して、どう思われますか。

石田　僕は、高齢化であるかどうかは、それほど大きな意味を持たない。持ってはいけないのではないかというのが、最近の思いですね。僕が大学の頃は、日本はこのままでいくと、人口が１億人超えてしまう。えらいことだと大騒ぎをしていました。いまは、少子高齢化だと大騒ぎをしています。「なるようにしかならんのだろう」というのを前提に考えるということを、もっとやらないといけないですね。

一次産業の人たちには定年がありません。二次産業、三次産業の人たちだけが定年をつくって、「定年を超えたら大変だ」と大騒ぎをしています。終身雇用と定年がセットになって存在する社会システムだったのに、終身雇用というところをはずして、定年という概念だけ残してしまったから大騒ぎになる。そろそろ二次産業も三次産業も、「定年なんかないんだ。みんなが一生働くんだ」という概念を持ってくるほうが先ではないのでしょうか。定年になってハローワークへ行って、「あなたは何ができますか？」「部長ができます」。これではダメでしょう。

「少子高齢化は大変なことだ」という物差しで見られていますけれど、じつはそれをちゃんと受け止めると、けっこう楽しいことになるのではないか。そういうことを誰かが言い出さなくてはいけないのではないかと思います。僕たちがこんなふうに思うことが、新しい仕

事をつくったり、若い人たちに夢を与えることになるのではないのか。みんなが「大変だ、大変だ」と言っていたら、若い人に夢なんか与えられません。

やなぎ　子どもの頃から私の回りには自営業の人しかいなかったので、サラリーマンという存在がよくわからないのですが。震災のあと、親戚とか知り合いが、東日本から疎開してきまして、２～５歳の子どもが４人に、祖父母が加わり、一気に三世代家族になりました。日中、大人は仕事と家事を分担し、夜中にネットで放射能のことを調べつつ対策を練る。おばあちゃんは、本当に役に立ってくださるんですが、おじいちゃんのほうは……（笑）。幼児が一人増えたのと同じでした。４人の幼児が保育園へも行かずにずっと家にいるわけですから、大人全員で面倒を見ないと回らないのに、おじいちゃんは新聞を読みながら大所高所から意見を言うだけで、絶対に自分で動かない。これにはホトホト困って、私も本気で怒りました。台所に立ったり、冷蔵庫を開けちゃいけないと思っていたんですって。子どもも触っちゃいけないと思っていたらしいんです。ところが、１カ月後には、なんと離乳食までつくれるようになったんです。やればできるんです。それをわからずに会社だけに献身して、もったいないことですよ。

石田　おじいちゃん、よかったですね。

やなぎ　急成長しましたね。これからの人生が豊かになったんじゃないかと思います。自分のご飯を自分でつくれるということ、これほど大事なことはありません。

小池　最後に、一つのご質問。「今日は、『未来につなぐライフスタイル』というテーマですけれども、３人の先生にとって、ライフスタイルとは何ですか？」。

私は両極あって、その間を揺れているような感じです。自然のままでいたいと思うと、お掃除もしないでのんびりとしている時もあるし、やたらに仕事に向かってしまう時もあります。自分なりの自然のリズムみたいなものが、ライフスタイルであるのかもしれません。それは、生活のいろいろな局面で細かくあって、どんな住まいが好きとかいう暮らし方のディテールに入るのかもしれませんが、大きな意味では、自分が納得し、他人にとっても説得力のある生き方がいいなあと、思っています。では、石田先生。

石田　僕は、こんなふうに思っています。ライフスタイルというのは、暮らし方の形ですよね。僕たちの潜在意識の中に、「楽しみたい」「自然と関わっていたい」「自分が成長したい」「社会と関係を持ちたい」というのがあります。それを素直にやることではないのかと思うんですよ。

僕は、自分が成長するために、たとえばネイチャー・テクノロジーという研究をする。あるいは、暮らしの中で成長したいために、料理をつくる。つくった料理を誰かにちょっとほめてもらいたいし、料理を通して近所の人たちとコミュニケーションがとれたらいいな。そんなことを素直にやっていくことができたら、それは僕にとって、とってもすてきなライフスタイルだと思います。

小池　やなぎ先生は、いかがですか。

やなぎ　「いつも大荷物を背負って走っている」と人に言われたことがあります。私も自分でわかっているのですが、どうもそれが私のライフスタイルのようで、変わらないですね。すべては制作の調子次第だし、決して省エネ型ではありません。４０歳を過ぎてから、ますます重量過多です。子どもや学生も乗っかっているし、演劇と美術はやりたいことが増える一方だし。ただ必要不可欠なものがはっきりしてきて楽になった部分もあります。制作を前進させるエネルギーを持ち続けるライフスタイルを心がけないといけないですね。

小池　今日のシンポジウム、そろそろクロージングの時間です。つたない司会でしたけれども、お話を閉じていきたいと思います。

環境問題とは何なのかということについて、石田先生のご指摘が非常に印象に残りました。やなぎ先生の老婆信仰の発見は、美術史をそのように見ていけるということが示唆され、いろいろなことを考えさせられました。お二人とも、ありがとうございました。